

王俊敏 『青城民族 一箇辺疆城市民族關係の歴史演變』  
 (『青城の民族 ある辺境都市の民族關係の歴史の変遷』)

天津人民出版社 天津 2001年 219p.

近年、地理学のみならず広範な学問領域において、中国都市に対する関心が高まっており、研究成果も公表されてきている。しかし、そこでの議論は、主に土地利用や建造環境についてのものが先行しているように思われる。中国国内はもとより日本においても、中国都市の地域社会や住民の抱える諸問題がしばしば報道されるにもかかわらず、それらを体系的に考察した研究はあまりない。また、中国の多くの都市では、例えば首都の北京市も含めて、少数民族と認定されている人々が、いわゆる漢族とともに居住していることが多い。しかし、民族文化や民族間の社会関係を視野に入れて、都市の構造や変容、住民行動をみつかった研究は少ない。

これらの空白を埋める役割を果たすであろう本書は、内モンゴル自治区の首府・フフホト(呼和浩特)市における漢族、モンゴル族、回族、満州族の民族文化の動態と社会関係について論じた好著である。著者の指導教授である馬戒の序言によると、本書は、著者が1996年に北京大学社会学系に提出した修士論文に、その後の研究成果を加筆したもののようである。そして、「社会学人類学論叢」という、北京大学社会学人類学研究所が中心となって企画されている研究書シリーズの第23巻として出版されている。なお、書名の「青城」とは、モンゴル語に由来する「フフホト」の意味を漢語に訳したものである。

本書では、各章の内容が相互に関連づけられて議論が展開されている。そのため、この書評では、まず目次の日本語訳を列記し、続いて本書の考察の内容と意義を検討していく。

目次

序言(馬戒による)

まえがき

第1章 民族の移住と居住分布の状況(上)

第2章 民族の移住と居住分布の状況(下)

第3章 行政制度と権力分配(上)

第4章 行政制度と権力分配(下)

第5章 教育の場における民族構成と交際

第6章 職場における民族構成と交際

第7章 民族と言語(上)

第8章 民族と言語(下)

第9章 民族と宗教

第10章 民族間の婚姻

第11章 民族意識

第12章 結論と討論

主要参考文献

あとがき

第1, 2章では、フフホト市の原型となる帰化城が建設された明代万暦3(1575)年から1996年にいたるまでの、移住と居住分布の状況が説明されている。なお、1997年現在におけるフフホト市の総人口は986,822人で、その民族別の内訳は、漢族・816,345人(82.7%)、モンゴル族・115,732人(11.7%)、回族・30,789人(3.1%)、満州族・19,478人(2.0%)である(p. 3)。中華人民共和国成立以降の居住分布については、フフホト市を4つに地域区分した「区」レベル、人口規模が約1万~6万人の「辦事処」レベル、および1,000~3,000人の「居民委員会」レベルというように、多様なスケールでの民族別の居住分布が示されている。さらに、多民族が居住している戸建住宅地や集合住宅の一区画という小地域を事例として、民族間の交流状況、および習慣の相違による文化的摩擦についても検討されている。ここで明らかにされていることは、1950年代以降、フフホト市の商工業の発展にともない、それまで比較的明瞭であった民族ごとのすみわけがあいまいになって、混住化が進行しており、特に1980年代からその傾向が強まっているということである。その要因は、中国では「単位」(機関、団体、企業など)が被雇用者のために住宅を整備・供給することが多く、その住宅開発の過程で、民族間の混住が進んだことである。

中国の都市構造や住民生活において単位が大きな影響力をもっていることは、先行研究でも指摘されており、評者も書評の形でそれについて論じたことがあるが(高橋 2003)、さらに本書では、居住地のみならず、学校や職場においても民族間の社会的・文化的交流が盛んになっていることが指摘されている(第5, 6章)。そして、「民族学校」や「民族単位」においても漢族の比率が増加し、それが、他章で検討される言語教育や民族間の婚姻などへも大きな影響を与えていることが具体的に説明されている。ただ、民族の居住分布の変遷、および事例として取り上げた学校や企業の立地については、もっと地図を用いて説明するべきではないだろうか。逆説的ではあるが、この部分で、評者は、地域の記述における地図で表現することの重要性を再認識したのであった。

漢族と少数民族の交際機会が増えたことに加えて、進学や就職の際に漢語(いわゆる中国語普通語)の能力が重視されるようになってきたため、フフホト市の少数民族の間では、民族言語が使用・学習されなくなっている(第7, 8章)。以前、評者がフフホト市を訪問した際には、標識や看板などの形で、街中で多くのモンゴル文字を目にしたことから、フフホト市におけるモンゴル語の使用状況は相当高いものと考えていた。しかし、本書によれば、実際には、それらのモンゴル文字は、そこが内モンゴル自治区の首府であるということを示すための象徴としての役割を果たしているに過ぎず、表記が間違っている場合も多く、そのうえ、地元のモンゴル族のなかには、モンゴル語の読み書きができない人が増えているということである。ここでの議論をさらに発展させて景観論と関連づけて考えると、少数民族言語の表記を景観としてとらえることにより、象徴としての文化景観という観点から中国都市を読み直すことができそうである。

第9章では、言語のみならず宗教信仰の面においても、特定の民族と宗教との結びつきが次第に弱まってきていることが指摘されている。例えば、かつては、ほぼ全員がチベット仏教の信徒であったモンゴル族のなかにも、漢族式の

仏教(いわゆる中国仏教)や道教を信仰する人が増加しており、またキリスト教徒も存在するそうである。

このように、居住地や学校、職場で多民族が接触する機会が増え、さらに言語や宗教、生活習慣などの文化的側面において、民族間の共通部分が大きくなっていることから、民族間の婚姻が増加している(第10章)。例えば、1995年の婚姻登記票の調査によると、満州族の98.8%、モンゴル族の78.0%もの人々が、他の民族と婚姻を行っている。また、宗教信仰という面だけでなく、価値観や日常生活習慣にもイスラームの影響を強く受けている回族は、これまではほとんどが民族内部で婚姻を行ってきた、または少なくともそう考えられてきた。しかし、本書によると約3分の1は他の民族と婚姻を行っているそうである。中国の都市部において、民族間の婚姻が頻繁に行われるようになってきているということが実証的に分析されており、たいへん興味深い。

では、人々の「民族」に対する意識は、全面的に薄くなっているのだろうか。必ずしもそうではないというのが著者の主張である(第3, 4, 11章)。例えば、漢語を使用するようになったモンゴル族も、自治区の自治を担うべき少数民族としての政治的地位や優遇政策との関連において、場合によっては以前よりも強い民族意識をもつことがある。満州族においても、1980年代以降、伝統芸能の復興を目指す活動が増え、さらに他省で満州族自治州が成立したことと関連して、民族意識が強化されている一面がある。回族においても、その名称を冠した行政区域である「回民区」における一部の優遇政策と関連して、民族意識が維持・強化されているようである。このようなことから、Glazer and Moynihan(1975)などの考え方を援用して、著者は、現代社会における民族を「文化共同体」としてではなく、「利益共同体」と「心理共同体」として理解する必要があるとまとめている。つまり、民族という「共同体」を通して、利益の分配が要求されており、たとえ民族の文化的特徴が薄れつつあるようにみえても、歴史的記憶や象徴の共有によって心理的な結び

つきがより強固になるという現象が、中国でも生じているのである。

今後は、本書で考察されたような傾向と中国の民族政策との関係について、より慎重に検討されなければならないだろう。つまり、中国では、戸籍や身分証に「民族」の記入欄があり、そこに、政府の認定した56の民族のうちのいずれかを記入しなければならない。さらに、少数民族、特に自治地域で自治を担当している少数民族であれば、出産や進学、就職などにおける利益の配分に相当の優遇がある。このような民族政策が民族意識の高揚に大きな影響をおよぼしているはずだが、本書では十分には検討されていない。この点については、むしろ外国人研究者の方が、多角的な議論を行えるのかもしれない。

総じて、本書は、中国の都市社会についての優れたモノグラフであり、同時に、現代社会における民族への視角を提示した意欲的な著作である。地理学の立場からみれば、地図の利用や統計の処理に不十分なところも散見される。また、インフォーマントとして、著者の友人や知

人が頻繁に登場することにも疑問が残る。しかし、それらを上回る大きな魅力として、聞きとりを中心とした調査手法が、都市研究においても十分に有効であるということの評者は読み取った。本書の全体にわたって、様々な住宅地、行政機関、学校、企業、宗教施設などでのインタビューの内容が載せられ、それらの積み重ねにもとづいて説得力のある考察が展開されている。地域社会の調査手法についても大いに参考になる1冊である。

#### 文 献

高橋健太郎 2003. [書評] 王 興中ほか：中国城市社会空間結構研究．駒澤地理39：105-107.

Glazer, N. and Moynihan, D.P. eds. 1975. *Ethnicity: theory and experience*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

N. グレーザー, D.P. モイニハン著 / 内山秀夫 (訳) 1984. 『民族とアイデンティティ』三嶺書房.

(高橋健太郎)